

路傍詩

● 版年七十八百五千二元紀 ●

詩 展 號

輯 一 十 第

二人集

血

三野 混沌

首を絞つた鴉が
すねこきをしてゐるやうに
頭をはさめうなだれた
火の前に

—— なまけを憎む
なまけを

さつきまではよろけて
穀物の袋をたがきだした
はあ ふるえるころ
かすかになつてしまつた
餓死する
餓死する

おれは殺す 死ぬ
おお遠い海鳴の方に
光は

一つ二つ三つ 一つ二つ
うすやみだ
捨てられた骸を また百姓が
までるか

憎む 憎む
骸をすら憎む
おお おお地はまつくろにか

きにこる

麥が生えてもためだ
菜が生いてもためだ
火を噴く煙よ

一列の この野をかけゆく
夜の群鳥が一時鳴き走る
飛び去る 亡霊の群か
すべての光は小さく
いろうせてる

地は枯れてしまつた
無人の火車が飛びゆく
その上を 躍り行く
地をかきながら
光強く 光強く
歸るな

あたらしき種は
この億万の鈍重がまく
あ、彼等の血よ！

地静

高瀬勝男

生物さへ一瞬もない
俺の呼吸も休止し
肉體から緑を産んだ
緑から俺は存在する
このだきしめた
このだきしめた

詩展作品

●猪狩満直

—(花)—

花

あのつめたい窓硝子に
よくも咲いた花だ

今朝

春が小屋をめぐつてゐるやう
でチロチロ小鳥も囀つてゐて
オレは花を消したくない

—(吹雪)—

吹雪 吹雪

まつくらにさわぐ
人間の聲がふつつぶれてしま
うほど

面——びしょ びしょ

肩までの雪を 泳いだ

●小林直人

—(懐しき街)—

いと單調なる務めの
ゆきとかへりに

ほのぼのとつかしき
わがひとつのなぐさめよ

青塗りの古風なる橋より
春雲のごと柔なる傾斜もて

だらだらと下りゆく街路よ

わざもに逢はむごころのとき
めきてうつつなき わが熱き
情緒よ

今宵もかしこの

煙草賣る店になご寄らむ

●高橋久由

—()—

子どもとあそぶ
庭の砂山をくづした

はだしで

あしうらがくすぐるから
いくらてもくすしてやつた

●大浦弘四郎

—(冬)—

しなびた林檎がおちて
水も出ない

南にゆかう

音響がまんまろく

眠りかけてゐる

●三野混沌

—(まつかな地面の上)—

まつかな地面の上
のびろ

夢はたしかにそだつてゐた

こどもらをひきつれて

電光とくねるみちをゆく

—(石を運んだ)—

石を運んだ

額の汗をふく 石で石に

着い空に

たくさんの白い鳥が飛んでゐる

ふぶき ぶぶき

●小林賢

—(雲)—

1 フラ フラ フラ フラ

天氣はインフルエンザに胃さ

れてる 辻待ちのタクシーは

一齊にはしり出した 南の街

から影をのせて疾走してきた

一台のタクシーのヘットライ

トにいきなり切り込まれた女

のショール

若い娘は無惨に倒れ

2 四辻に背を向けて立つた女め

くらは浅をたらしした

●猪狩一馬

—(夜中にて)—

三間の爐に

生木が煙草を吹いてゐる

蟲の音楽

チュ~~~~~チュ~~~~~チュ

バチン バチン バチン

バン トチ バーン トト

青笹の上に 小屋一杯の

山脈 模形

●押尾孝

—(君達へ)—

出勤の途中に

町角で受け取った一束の手紙

よ ああ、久し振りで

今朝の心は ばかに明るい

早く停車場に行つて

待合のクッションに腰かけて

汽車のくるのを待ち乍ら

その手紙の封を切るとしやう

か

それともその手紙の束をボ

ケットに突込んだまま

午前中の仕事を終して

さて午餐のあとの小憩にゆつ

くり読むとしやうか

けれども おう友よ!

今の私は その手紙を

チカチカと霜の勾ひのする麦

畑や

ちらちらと萱の葉に陽のもれ

る山林で

読むことを許されないことが

悲しい

●妻木泰治

—(かへるつば)—

人も知らない野原に

掌をひろげて

光を浴びてゐるのがいいな

かへるつば

●高瀬勝男

—()—

空は悲を含んで

たれさがり

蛙

お前の背中は他響だ

●島田春雄

—(冬)—

凍った鏡の面

白い月がぼつかり花咲いた

空。

●中野勇雄

—()—

月の出

つづばつてゐる樹の股

遠い潮鳴りだ

●松本純一

—(おれ)—

大空だ

力がなみなみ打つてゐる

そのふところに飛びこんちや

つた つばくら

キリキリツと舞ひ上つた

—(童賦)—

ゆうだれくもにてをちぎりち

ぎりおよいでくるいつびきの

うを

かわみづはかくくごどもを

せをつた

劇詩「復活」三幕

×

松本純一

在來の戯曲的演出法を用ひず、ト書の進行だけに止め

第一幕

●青いビロードの世界がマン
トの様にひろがつてどこか
らとなく悪魔の呼吸がする
●私は喰ひちがつてきた頭の
機械をそつと取りだす
●そこは無暗に綺麗なスベス
べした室である
●圓推形の天井は真中からな
やましいシャンドンアがぶ
らさがる
●まばゆいコバルト色の寢床
が鴛鴦のやうにかがんでゐ
る
●私は軽々しく黄ろい快感を
思はず分泌腺からたらす
●周囲は僅かに壁書の圓滑さ
に紛れて何物も感じない
●燃えつくやうな赤い鏡戸の
脊中は窓である
●私は悪魔の足跡があくまで
壯美なものにおごろく
●お前はそんなに美しいと思
ふかね
●すき通る皮膚の壁から突然
明朗な聲がきこへる
●お前はそのベットに憩むが
いい——
●誰の寢床だ！……

●莫迦な、誰のでもない、真
紅な掛衣をめぐつて見ろ！
●何らかい笑ふ私の聴神経が
むらさきの光線を浴びる
●悪魔の聲がおどけてないとい
ふこゝがわかる
●がなせか私は自分を眼前へ
怯れずに指摘し得る氣がし
てならない
●悪魔よ私は誰だ！とは訊き
たくないが、どうして私を
この室へ連れてきたのだ！
●裸体の少女らが抱合つてゐ
る壁書、ボツカリとランプ
が點じる
●お前は、お前の肉體の臭氣
を感じるかね
●解らないね、今嗅いでみや
うと思ふ
●なんと美妙なメロデーが柔
かく壁の毛孔を突き抜けて
くる
●嗅げ、嗅いでみろ！
●私は冷たいが、なだらかな
衣服をめぐつて二の腕を鼻
に喰ひこます
●私はおどろかないが不思議
に思ふ、金々臭氣がない
●お前は、お前をちやんと掴
めるかね
●だつて私は驚くということ
を忘れて了つたやうだ！
●圓みを帯びた壁の中をグル
グルと聲が猫の足で歩む
……未完……
◇註。次輯で完全にする積り
だ。劇詩の研究を募る。

編輯后記

手 夢に夢を見ながら
つめたくいていゝ他的手
目 深い谷をせむいで
平地を蹴るが
耳 太陽の光を隠けども
すぐ消えてのこらず
足 足は
響かず鈴の如く重く
又雪雲の如く冷たい
お前、俺の足は言葉をもたない
ふるいながら色をみつむる
口 強い線をひくことが出来ず
いつしもちがな形をみつめる
高瀬勝男

◇一週年紀念！むせつぱい悦びが噓つけない

記憶未明にある例の「マラテラ」事件の足跡が「路傍詩」の社會的進出を正確に指摘し
た——その事がなによりゴエタル・パリーなんだ

寒い おなじやうな日夜を偲んで背効い夜の街辻を大きな掌がノリをのたくつゝ草の芽
間氣を塗り變へて行つたあの「力」が懐しい

◇ふりかメライド高瀬勝男の童貞出版たる詩集「赤の斑点」が市場に躍りあがつた
彼の持つ特異な詩風がなんら目障りなしに土の聖書をなした一事で其の價值が素
邊にあるか推察できるだらう 是非一讀されん事を奨める

◇事で催した第二回の「詩展」作品を氣樂に編輯したら皆んなも氣樂に味讀して欲しいも
のだ

色んな事情から今後の路傍詩は會員組織で進行したい考へだより立派なものを生産するに
はやつぱりそんな道程が必然的に起つてくる 詳しいことは當社宛に問合せを願ふ

松本純一

高瀬勝男 著

詩集 赤の斑点 二十錢

申込所 「路傍詩社」

昭和二年二月一日發行

編輯兼發行人 高瀬勝男・松本純一

印刷所 福島縣平町白銀町

印刷所 丸山印刷所

發行所 福島縣平町町六二

詩 傍 詩 社